

金国璞の北京語教科書における起点介詞の使用 —『儿女英雄伝』との比較—

楊璇

The Usage of Starting Prepositions in Jin Guopu's Beijing Dialect Textbooks: Comparing with *Ernyingxiongzhuan*

YANG Xuan

要旨

金国璞，字卓菴，北京人，生卒年不详。1897年作为高等商业学校附属外国语学校（现东京外国大学前身）一名汉语教师赴日，工作6年后于1903年归国。金国璞作为汉语教师的教学生涯中现有近可循的汉语教科书共16本，其中由金国璞参与成书的共14本，参与校对的共2本。

本文主要讨论金国璞参与成书的14本汉语教科书中的12本口语教科书的介词使用情况及对比北京话武侠小说《儿女英雄传》中的起点介词的语法特征，并结合周一民的《北京口语语法 词法卷》及太田辰夫的《中国语历史文法》，归纳总结金国璞口语教科书与《儿女英雄传》中起点介词使用上的异同。通过对比发现，金国璞口语教科书中起点介词“从”的使用频率急剧下降，“起”的使用频率急速上升，并且出现了《儿女英雄传》中没有使用过的新起点介词“解”，“由”和“打”在用法上也发生了变化。

キーワード：金の会話教科書、《儿女英雄传》、起点介詞、比較対照

目次

1. 金の北京語教科書と北京語起点介詞
2. 金の会話教科書と《儿女英雄传》の起点介詞の使用状況
- 2.1 「打」

2.2 「起」

2.3 「从」

2.4 「由」

2.5 「解」

3. 金の会話教科書と《儿女英雄传》における起点介詞の使用分析

4. 余論

1. 金の北京語教科書と北京語起点介詞

金国璞は、字を卓菴といい、北京出身であり、生没年不詳である。明治30年(1897)に開校した高等商業学校附属東京外国語学校講師として日本文部省により招聘され、日本で6年間勤務した後、明治36年(1903)に帰国した。帰国後、日本で教えた北京在住の日本人元生徒らが出資して1903年8月に「支那語研究舎」(後に清語同學會に改名)を設立し、独身の金氏はそこに住みながら長年¹⁾日本人学習者に中国語を教え続けた。

金国璞は生涯数多くの北京語教科書を出版し、教科書の形式は時文教科書と会話教科書に2分類できる。会話教科書は12冊²⁾に上り様々な場面において使える日常会話を中心に編纂された。

明治時代の北京官話教科書の言語について、多くの研究成果が発表されているが、金氏の会話教科書に対する全般的な語学研究は未だされていない。小論は金氏の会話教科書を中心に、その中で用いた起点介詞を取り上げ、先行研究を参考した上で、使用状況を分析する。さらにその用法と《儿女英雄传》の起点介詞用法を比較し、それぞれの相違点を解明したいと考える。

北京語の起点介詞に関する先行研究は太田辰夫と周一民の論述が代表的なものとなる。太田氏『北京語の文法特點』(1965:50)は起点介詞について「起点をあらわす『起』『解』は南では用いない。また『打』も用いることが稀である。南京官話では『從』『由』などを用いる。」と指摘している。周氏《北京口语语法・词法卷》(1998:217)の文法分類は太田(1965)よりさらに詳細であり、現代北京語の起点介詞については“北京口语里表起点的介词比较丰富。单音节的有‘由，打，且’，‘且(qiè)’在风格上更土一些，它还有两个变体‘起(qǐ)’和‘解(jiě)’，它们的来源有待考察。”と指摘した。

明治時代の北京官話教科書に使用する介詞について、杨杏红《日本明治時期北京官話課本语法研究》(2014:135)は“日本官話課本中出现了7个具有明显口语特色的北京官話词汇：‘起’‘打’‘从’‘由’‘解’‘接’‘跟’。”と指摘している。

小論の比較研究では、明治時代の北京官話教科書を多く用いる、また金の会話教科書において多く使用されている起点介詞「打、起、从、由、解」を分析の対象とし、

「接、跟」は起点介詞使用例がないため除外する。

2. 金の会話教科書と《儿女英雄传》の起点介詞の使用状況

《儿女英雄传》は中国清末期の文康が著した白話文武侠小说であり、全40回から構成される。馬從善の序によれば、作者の燕北閩人こと文康は字を鉄仙といい、満洲八旗の鑲紅旗人の家庭に生まれ、正確な生没年は不詳である。《儿女英雄传》は作者晩年期、同治帝時代（1862-1874）に成書した。最初は写本として流通していたが、光緒4年（1878）に初めて北京聚珍堂から木活字本で出版された。

金の北京語教科書について、現在までに確認できた出版物の中で刊行年が最も早い教科書は1898年に平岩道知により出版された《談論新編：北京官話》であり、最後は1911年に文求堂から出版された《北京官話：今古奇观第2編》である。刊行年から見ると金の会話教科書と《儿女英雄传》の差は約33年となる。

金も文も北京出身であり、金の会話教科書と文の《儿女英雄传》が両者とも北京語で書かれているため、両者の比較研究は清末北京語の実態解明に意義がある。

2.1 「打」

呂叔湘《現代漢語八百詞》（1999：138）は「打」について“从，用于口语。1. 表示处所、时间、范围的起点。2. 表示经过的路线场所。”と解釈し、さらに“‘打’带有北方方言色彩，普通话里一般用‘从’。”と補釈を付した。

「打」の由来について、これまでの学術見解は異なる。太田『中国語歴史文法』（1958：252）は「現代語では時間場所ともに用いるが、古くは場所のみ用いた。（中略）《打》は《道》の変化したものであると言われる。」と指摘している。また、劉堅等《近代漢語虚詞研究》（1992：229-231）は“在唐代，动词‘打’由‘锤击’义产生‘扑打’‘冲撞’义，……说明动词‘打’跟介词‘打’之间存在内在的联系，‘打’具备由动词向介词转变的条件，而实现这一转化，我们认为下面一个环节是不可缺少的，即表示经由的动词‘打’+处所词。”と指摘している。

「打」を時間の起点として用いたのはかなり遅く、張美蘭等＜清末漢語介詞在南北方言中的區別特征——以九江書局改寫版《官話指南》為例＞（2007：315）は“‘打’介紹時間的起始，始見于清代。”と指摘している。

《儿女英雄传》における「打」の用例は10例あり、場所の起点、場所の経由と時間の起点を表す用例はそれぞれ6例、2例、2例ある。場所の起点は“哪儿呀！才刚不是我们大伙儿打娘娘殿里出来吗？³⁾”（第三十八回）；場所の経由は“回來你老打了尖，就打那庙头里过，白瞧瞧，那烧香的人有多少！”（第三十八回）；時間の起点は“不曾打寅初，便把公子叫醒，梳洗穿衣上去，幸喜老爷还不曾出堂。”（第三十四回）などの用例がある。

金の教科書において「打」は場所の起点と場所の経由を表す用例があり、それぞれ35例と2例見られる。場所の起点を表す用例は、例えば“我打家里来，外头有什么新闻没有。”（《虎头蛇尾》）；“打天津往这么来的轮船，所过的各口岸总不免有上货卸货的事情。”（《土商丛谈便览》第六章）がある。場所の経由を表す用例は、例えば“我这一回打那个镇店上路过，那气象所大改了。”（《土商丛谈便览》第七十三章）；“小的要和他到衙门打官司去，正在这儿闹得不可开交了，可巧太爷打这儿路过，所以小的喊冤。”（《华言问答》第二十五章）がある。金の教科書の中には「打……到」などの組み合わせの用例も見られ、例えば“如今若问我那一路上打那儿到那儿是多远，我全都不记得了。”（《土商丛谈便览》第三章）があるが、このような用例は《儿女英雄传》には見られない。

2.2 「起」

太田（1965：217）は起点を表す介詞「起」は「南では用いない。」と説明している。また、周一民（1998：217）は“‘且（qiè）’在风格上更土一些，它还有两个变体‘起（qǐ）’和‘解（jiě）’，它们的来源有待考察。”と指摘した。高艾军等《北京话词典》（2013：699）は「起」について“从，自。”と解釈した。

時間の起点を表す「起」の用例について、汪维辉《试论齐民要术的语料价值》（2004：90）は《齐民要术》の卷六の項目「養羊」にある用例“旦起，沔酪著瓮中炙，直至日西南角，起手抨之，令杷子常至瓮底。”を挙げ、「起手」は「起头；开始」と解釈している。場所の起点を表す「起」の使用について、张美兰等（2007：314）は清代から初めて用いられたと主張した。

《儿女英雄传》では、「起」の用例は2例しか見られない。時間の起点と場所の起点を表す用例が1例ずつあり、“起那天，这城隍爷就灵起来了：不下雨，求求他，天就下雨；不收成，求求他，地就收成；有了蝗虫，求求他，那蝗虫就都飞在树上吃树叶去了，不伤那庄稼；到了谁家为老的病去烧炷香、许个愿，更有灵应。”（第二十二回）と“又说道：“大兄弟，你瞧，起脚下到北边儿，不差甚么一里多地呢，我瞧你了不了。”（第三十四回）となる。

金の会話教科書において「起」の用法は場所の起点として多く使用されているが、経由の起点を表す用例は少ない。また、時間の起点に用例が見られない。場所の起点例は、例えば“他就赶紧的起人群儿里跑了。”（《北京官话：今古奇观第1编 十三郎》）；“他起外头喝了个大醉回来，直嚷热的了不得，要到河里洗澡去。”（《华言问答》第十七章）がある。経由の起点例は、例えば：“可巧这个功夫本县的太爷起那儿过，周自清就和那个人说，你不是要和我打官司么，现在本县的太爷来了，咱们俩拦舆告状好不好。”（《华言问答》第二十五章）がある。

2.3 「从」

「从」の使用に関して、太田(1958:252)は「古代語から用いられたが、時間をあらわすばあいには用いられることは稀で、多くは場所をあらわすばあいには用いられる。」と指摘している。《現代漢語八百詞》(2016:130-131)は「从」の用法について“①表示起点;②表示经过的路线,场所;③表示凭借,根据。”と三つに分けられている。

《儿女英雄传》にある「从」の用例は、韓璇《儿女英雄传介词研究》(2011)による統計で559例にのぼる。場所の起点を表す用例は432例であり、例えば“那报喜的谁不想这个五魁的头报?一得了信,便随着起早下圆明园的车马,从西直门连夜飞奔而来,所以到这里天还没亮。”(第一回)がある。場所の経路を表す用例は64例、例えば“前番安公子从牯牛山过,要让安公子上山饮酒的就是他。”(第二十一回)がある。時間の起点を表す用例は63例であり、例えば“从第二日起,他便催着舅太太动手。”(第二十四回)がある。

金の教科書も《儿女英雄传》と同じく、三分類の用例が見られるが、場所の経路を表す用例が1例だけ見られる。例:“我今年又从那个地方过,我一看,那个地方儿的气象不如从前了。”(《华言分类撮要》第二章地輿門)。場所の起点を表す用例は67例、例えば“你从哪儿来。”(《虎頭蛇尾》);“就连从紫竹林往上去的那一条关道,也都修理的很整齐。”(《北京官话:谈论新编》第四章)がある。時間の起点を表す用例は8例であり、例えば“从昨天晌午头里到宅里来的。”(《北京官话:今古奇观第2编 沈晓霞》);“从去年秋天添设贵国语言,馆名曰东语馆,也是和别国语言馆规模是一样的。”(《北京官话:谈论新编》第二章)がある。

2.4 「由」

《儿女英雄传》では、「由」の用例は19例である。他の起点介詞と異なり、「由」は場所の起点を表す以外、官職、身分などの抽象的な意義を持つ起点の用例が見られる。場所の起点を表す用例は17例であり、例えば“却说那河台一面委员摘去安老爷的印信,一面拜发折子,由马上飞递而来。”(第三回)がある。官職、身分、方式などの抽象的な意義を持つ起点の用例が2例であり、例えば“他在浙江差次就接到吏部公文,得知由阁学升了兵部侍郎。”(第十三回)がある。

金の会話教科書における「由」の用法が《儿女英雄传》と異なり、場所の起点を表す用例と抽象的な意義を持つ起点の用例が見られる以外、時間を表す用例が2例ある。例えば:“请问老兄是由几时丁的忧。是由今年春间。”(《改订官话指南》卷之四第十五章);“这改铸银钱是由多咱起呢。”(《北京官话:谈论新编第九十七章)がある。場所の起点を表す用例は24例あり、例えば“原是由山西那边来信,托他给请人是这么荐妥的。”(《搢绅谈论新集》第四章);“都是由江苏浙江两省运来的。”(《北京官话:谈论新编》第三十五章)がある。抽象的な意義を持つ起点の用例は20例あり、例え

ば“我是由洋差照例保举的。”（《摺绅谈论新集》第三章）；“他是由翰詹升到阁学，就放了外头巡抚了。”（《士商丛谈便览》第二十三回）がある。

2.5 「解」

「解」について、太田（1965：50）は「起点をあらわす「起」「解」は南では用いない。」と提示したが、由来に関して詳細な説明はない。周一民（1988：217）は“‘且（qiè）’在风格上更土一些，它还有两个变体‘起（qǐ）’和‘解（jiě）’，它们的来源有待考察。…‘解’从语音上看与东北方言的介词‘搁’（gē/gě，当‘在、從’讲）有对应关系。”と述べている。また、陈刚《北京方言词典》（1985：133）は“‘解’同‘接’1. 自，从。2. 经由。”と解釈した。

杨杏红（2014：120）は“介词‘解’除了引进时间和起始处所及经由的某个处所以外，无其他用法，所有用例均可以用‘打’或者‘从’替换。现在在北京方言中还有此用法。”と指摘している。

《儿女英雄传》では「解」の用例が見当たらないが、金の会話教科書においては使用されている。用法は場所の起点と時間の起点を表す両方が見られる。場所の起点を表す用例は42例あり、例えば“王生就解袖子裏拿出拿包銀子來。”（《北京官话：今古奇观第2編》、懷私怨）；“可不是么，我是才解衙門回來。”（《华言问答》第十二章）がある。時間の起点は2例だけ使用されており、例えば“那么叫他解多咱來伺候您哪。”（《改訂官话指南》卷之三、第1章）；“他就解前年由外头被议回來，直到如今賦閑在家。”（《摺绅谈论新集》第七章）などがある。

3. 金の会話教科書と《儿女英雄传》における起点介詞の使用分析

《儿女英雄传》と金の会話教科書に用いられた五例の起点介詞の使用状況を表1に示す。

表1 《儿女英雄传》と金氏の会話教科書に使用した起点介詞の使用状況

| | 《儿女英雄传》 | | 金氏の会話教科書 | |
|---|---------|-------|----------|-------|
| | 使用頻度 | 割合 | 使用頻度 | 割合 |
| 打 | 10 | 1.7% | 37 | 12.1% |
| 从 | 559 | 95.1% | 76 | 24.9% |
| 由 | 17 | 2.9% | 46 | 15.1% |
| 起 | 2 | 0.3% | 102 | 33.5% |
| 解 | 0 | 0% | 44 | 14.4% |

《儿女英雄传》で使用された“从”は559例あり、“起点介詞”の9割以上を占めて

いることから、《儿女英雄传》の主要な起点介詞とすることができる。しかし、北京語によく見られる「打、起」の用例は合計10例で、かなり少ないことが分かる。金の会話教科書において「起」の使用頻度が最も高く、次が「从」であり、前者の割合が33.5%、後者の割合が24.9%、起点介詞の半分以上を占めていることから、「起、从」が主要な起点介詞とすることができる。

使用方法から見ると、「从」の用法が最も豊富であり、場所の起点、場所の経由、時間の起点の三分類である。さらに《儿女英雄传》に「从……起/到/至/直到」との組み合わせの用法も大量に見られる。《儿女英雄传》で用いた「打、起」と金の教科書で使用した「打、起、解」の用法は「从」の用法に含まれていることが分かる。また、「由」は「打、起、解、从」がない抽象的な意味を表す用法を有することも特徴である。

4. 余論

小論は先行研究を参考にした上で、金の会話教科書と《儿女英雄传》の起点介詞の使用を考察し、使用頻度と割合を分析した。その結果、同じ北京語で書かれた金の会話教科書と《儿女英雄传》には起点介詞の使用には互いに差異があることが分かった。

(1) 「从」の使用頻度は三十年間で急速に下がった

《儿女英雄传》には、起点介詞に関してほとんど「从」を使用し、他の北京語の特徴を持つ「打、起」の用例が合計10例のみ見られ、「解」の用例は見当たらない。

「从」の使用変化について、陈秀兰《敦煌变文与汉语常用词演变研究》(2001:52)は“‘自’‘从’在上古均可用作介词，介进时间，方位，人物，‘自’的使用频率大于‘从’。自汉魏始，形势发生变化：在文言作品中，‘自’的使用频率高于‘从’，在口语程度较高的作品中，‘从’的频率高于‘自’，占绝对优势，说明在世纪口语中‘从’已居于统治地位。”と指摘している。《儿女英雄传》は話本小説で、講釈師の種本をもとに作られた小説であり、作者の習慣が小説に使用された言葉を決める。《儿女英雄传》の作者文は北京出身で、《儿女英雄传》において「从」を9割以上使用したことから、当時の北京語では「从」が主流の起点介詞として使われていたことが断定できる。使用方法も豊富であり、他の起点介詞がかなわない存在とも言える。その使用頻度から見た金の会話教科書への用例変化は95.1%から24.9%に急速に下がり、33年前の3割以下(26%)に止まることとなった。これは清末北京語の口語層が生じた急激な歴史変化を物語る根拠の一つと言える。また、金の会話教科書になると場所の経由に使用しなくなった現象は「从」の使用機能の変化に関連があるとも推測できる。

(2) 「解」は新しい起点介詞として登場した

《儿女英雄传》の言語について、王静《〈儿女英雄传〉儿化词浅析》(2010: 109)は“红楼梦面世一百年满人文康以极纯熟地道的北京口语、俚俗民谚写出了《儿女英雄传》，这两部作品被誉为两部绝好的京语教科书。”と指摘し、《儿女英雄传》は「极纯熟地道的北京口语」で書かれた作品として評価した。

《儿女英雄传》において唯一使用されていない起点介詞「解」について、太田(1965: 50)には「南では用いない。」と述べた。周一民(1998)は「解」を北京語の起点介詞「且」の変化体と認定し、由来について中国東北方言の「摺」(gē/gě)と対応関係を持つと説明した。尹世超《哈尔滨方言词典》(1997: 173)は「摺 kai213」を介詞として分類し、意味は「在、从」と解釈した。少なくとも「解」(尹書は「摺」と書く)は北京語と東北方言に存在すると言える。

太田(1965: 38)が「北京語は北方語の一方言であるが勢力が強く、また両者は厳密に区別のつけられないことも多い。」と述べたように、「解」の使用は北京語の特徴だけではなく、北方方言としての表現も見られる。しかし、《儿女英雄传》到北京語と東北方言に共存する「解」の使用が見当たらない。この現象について、杨杏红(2014: 131-132)は“这种现象的产生跟北京官话的形成特点有关，北京官话源于满人入关之前的东北方言，因此一些东北方言的介词用法可能被保存下来；在内外城的交往中，北京官话也可能吸收了当时北京土语的一些用法；北京官话被推广到全国各地，有些方言地区的介词用法可能会被带入北京话。”と指摘した。

時代の変遷につれて、新しい北京語の要素が次第に増えてくるとともに、旧時代の用法が次第に減り、変化が生じた。「解」は起点介詞として清末の北京官話教科書において多く使用されるが、《儿女英雄传》には使用されていないことから、「解」の使用は《儿女英雄传》の成書期まで普及していないと考えられる。このことから金の会話教科書には当時最新の北京語表現を取り入れたことがうかがえる。

(3) 清末北京語の起点介詞は全般的な変化を遂げた

金の会話教科書において使用した起点介詞は「起、打、从、由、解」の五語となり、杨杏红(2014: 135)において指摘された“日本官话课本中出现了7个具有明显口语特色的北京官话词汇”の中における使用例のない“接”と“跟”以外、すべて一致する。これで金の会話教科書に使用された言語材料は“日本官话课本”の“具有明显口语特色的北京官话词汇”という性質を裏付ける根拠となる。

表1から見た《儿女英雄传》と金の会話教科書の起点介詞の使用推移から、上述した「从」の使用は格段に下がったうえに、使用順位で見ると《儿女英雄传》の「从、由、打、起」から「起、从由、解、打」に変化したことが確認できる。このことから以下のように解釈できる。①「起」が「从」の衰退とともに第四位から第一位に急上昇し、

使用が迅速に広がった。②「由」は「从」の衰退とともに活発な使用がないが、抽象的な意味を表す用法を生成し独自に発展した。③「打」がもつ場所の起点、場所の經由と時間の起点を表す三種の用法は《儿女英雄传》時代から金の会話教科書時代に変化した、時間の起点を表す用法がなくなり、新しい起点介詞「解」の登場と共に使用が衰退し、最下位となった。

小論で考察した清末期北京語起点介詞の変遷はデータに基づいた相違点を分析し、多少結論を示したが、また関連上で未解明な所が多く有り、今後の課題とする。

注

- 1) 帰国した1903年から金氏が編纂した最後の教科書《北京官话：今古奇观第2編》(1911)の出版まで、最短8年間となる。
- 2) リストは文末の〔研究資料〕を参照。
- 3) 本論において引用した《儿女英雄传》の用例は、《古本小说集成》に収録された北京聚珍堂木活字本(1878年)を底本にし、くぎり符号は齐鲁书社《儿女英雄传》上下(1989)を参考した。

研究資料

- 金国璞 / 平岩道知 1898《谈论新编：北京官话》 平岩道知
金国璞 / 平岩道知 1900《北京官话：谈论新编》 文求堂书店
金国璞 1901《土商丛谈便览》上卷 文求堂书店
金国璞 1902《土商丛谈便览》下卷 文求堂书店
金国璞 1903《华言问答》 文求堂书店
金国璞 / 諸岡三郎編 1903《虎头蛇尾》 諸岡三郎
吴启太 / 郑永邦著 金国璞改订 1903《改订官话指南》 文求堂书店
金国璞 1904《北京官话：今古奇观第1編》 文求堂书店
金国璞 1907《北京官话：虎头蛇尾》 德兴堂(北京)
金国璞 / 鎌田弥助 1907《摺绅谈论新集》 文求堂书店
金国璞 / 瀬上恕治 1907《华语分类撮要》 文求堂书店
金国璞 1911《北京官话：今古奇观第2編》 文求堂书店
〔清〕文康 1878《儿女英雄传》 聚珍堂书房木活字本，《古本小说集成》(1994)上海古籍出版社收录影印版
〔清〕文康 1989《儿女英雄传》(上下) 齐鲁书社

参考文献

- 太田辰夫 1958『中国語歴史文法』 江南書店
太田辰夫 1965「北京語の文法特點」『中国研究：経済・文学・語学 久重福三郎先生坂本一郎先

- 生還曆記念』久重福三郎先生坂本一郎先生還曆記念行事準備委員会編
陈刚 1985《北京方言词典》商务印书馆
刘坚 / 江蓝生 / 白维国 / 曹广顺 1992《近代汉语虚词研究》语文出版社
尹世超 1997《哈尔滨方言词典》江苏教育出版社
周一民 1998《北京口语语法·词法卷》语文出版社
吕叔湘 1999《现代汉语八百词》增订本 商务印书馆
陈秀兰 2001〈敦煌变文与汉语常用词演变研究〉《古汉语研究》2001年第3期 p50-53
汪维辉 2004〈试论齐民要术的语料价值〉《古汉语研究》2004年第四期 p84-91
张美兰 / 李颖 2007〈清末汉语介词在南北方言中的区别特征——以九江书局改写版《官话指南》为例〉《继往开来的语言学发展之路》语文出版社
王静 2010《〈儿女英雄传〉儿化词浅析》安庆师范学院学报（社会科学版）第29卷第4期 p109-p113
韩璇 2011〈儿女英雄传介词研究〉浙江师范大学硕士学位论文
高艾军 / 傅民 2013《北京话词典》中华书局
杨杏红 2014《日本明治时期北京官话课本语法研究》厦门大学出版社
吕叔湘 2016《现代汉语八百词》（增订本）商务印书馆